



2003年第10回わかば祭練習にて

わかば学園中学部

樋口勝一教諭

保護者 渡辺正則

2004年1月

のんちゃんと楽しくのびのび歩む

わかば学園中学部

樋口勝一・渡辺正則

1、のんちゃんとの出会い

2003年3月13日新中学部1年生の一日入学があった。3年生の担任は、その対応にあたることになった。その新1年生の中にのんちゃんがいた。

あわただしく玄関を入ってきたのんちゃんは、いかにも多動というイメージで落ち着きのない子だった。お母さんは立ち話で一言「この子は緊張すると、よくトイレに行くのですみません。」と伝えてきたが、そのことば通り真っ先にトイレに走った。用を足した後も、一つひとつ便器の水を流していく。最初は「ダメ!」と規制したが効き目はなかった。学部集会の行われる視聴覚室にへ一緒に入ろうと誘うが入らないばかりか、次のトイレに入っては水流しを続けている。こうなったら、学校中のトイレの水流しをさせて落ち着かせるしかないと開き直り、二人でトイレ巡りを始めた。「のんちゃんは男の子」「水流すんは？」などといながら、便器の水を片っ端から流していった。いかにも滑稽な光景であるが、これがのんちゃんと私の激しい出会いであった。そんなのんちゃんを担任することになった。

ところが、入学式の日、**予定を確かめる言葉**はひっきりなしに口にしているものの、一日入学の時の激しさが嘘のように教室に馴染んで座っているではないか？私たちは、一日入学の様子から見て一ヶ月くらいは私たちとの激しいやりとりがあって、そのうち慣れていくであろうという見通し

を持っていたが、その見通しは見事にはずれ、のんちゃんは次の日もその次の日もすんなりとわかば学園の生活に馴染み楽しい学校生活を送ることになる。

こののんちゃんの変化（順応）には両親も大変喜び、日々の連絡帳に生き生きとのんちゃんの様子を綴ってきてくれている。大きな行事の後などには、レポート用紙に丹念に綴った手紙を添付してくれることもある。両親の手紙を読みながら、わかばが本当にのんちゃんにとって居心地のいい空間になっていることを痛感するとともに、家族が一人っ子ののんちゃんを中心に一丸となって子育てをしている姿に感動を覚える。そんな家庭の協力のおかげで、日々楽しくのんちゃんを見つめ、楽しくのんちゃんに関わることができている。

よく家庭と学校との連携というが、のんちゃんの家とわかば学園との関係は、文字通り素晴らしい連携を現実のものとしている。学校だけではできないこと、家庭だけでもできないことが、両者の力が呼応して、のんちゃんの育ちの場をより豊かにしているように思えてならない。

ここでは、のんちゃんの入学後の成長の様子を、学校と家庭の連携という側面から見直してみたいと思う。さらに、のんちゃんの育ちを考える上で、わかば学園が持つ意味も明らかにしたいと思う。

2、のんちゃんの生いたち

のんちゃんのお父さんは、2002年10月に「のんちゃんと歩む」というホームページを開設している。

(<http://www.mctv.ne.jp/~purasu/>)

それを参考してもらいながらも、新たにこのレポートのために、以下「言葉と会話」という観点から、のんちゃんの生いたちを書き下ろしていただいたので紹介したい。

1991.2.14 のんちゃん誕生

想像もしなかった世界に関われる幸福を与えてくれる事になる則道が誕生しました。
(普通の赤ちゃん)

赤ちゃんの頃は、立つのと歩くのと言葉の出るのが遅いと感じるくらいで、まさか脳に障害を持って生まれてきたなんて思いもありませんでした。そして、歩けるようになってからは、私、いえ家族の苦悩と地獄の日々が始まりました。

(多動症)

寝ている時だけと言ってよい程、動きづめでした。座ってもお尻を軸にしてくるくる回り食事も椅子に座ってられない程でした。『もう電車に乗れない』『裸で脱走』『外食はいや』(HP参照)等挙げればきりが無いほどの苦悩の日々でした。しかし、保育所入所前までこのすさまじい動きが多動症というものだとは知りませんでした。

(言葉が出ない)

多動だけではありませんでした。この頃は「きゃー」という声しか発しませんでした。初めて言葉になったのは「わんわん」でした。犬を飼っていたので、「ママ」よりも「わんわん」の初の言葉に悲しいような嬉しいような気持ちでした。しかしこの後発する言葉は「わんわん」のみで、泣く時以外口から出るのは全て「わんわん」でした。つまり犬を指しているわけではなかったのです。数ヶ月間この状態が続いた後「わ

んわん」は全く発する事がなくなりました。
(たーたー、いーいー)

突然「わんわん」を言わなくなっただけで「たーたー、いーいー」しか喋りませんでした。しかし「たーたー、いーいー」は、場所や様子で何を言っているのか大体分かりました。たとえば「いーいー」がドライブ中だと『とけい』、家では『オシッコ』でした。何故そうなるのかは毎日一緒に暮らす中から会得したもので、家族だからこそ理解できました。

1994.4 のんちゃん保育所入所

児童相談所と病院のアドバイスを受け、保育所入所を決めました。

(情緒障害、多動症による重度発達障害)

Hクリニックの診断でした。保育所入所時も「たーたー、いーいー」のみで、保育所では環境の変化に耐えられず毎日のようにパニックになり泣いていたようです。

(今考えると思い当たる節あり)

則道は怪我をしても全くと言ってよいほど泣きませんでした。ある時など顔を打ちつけ鼻と口から大量の出血をしましたが笑っているだけなので強い子だと思っていました。また目を見つめるとあさっての方向を見て焦点が合いませんでした。後に自閉症の子に多い特徴だと知りました。また水に異常な執着心があり、特に流れる水に興味を示していました。後にトイレ王となる前触れだったのでしょう。しかし、いつ頃からトイレに執着するようになったかは記憶がありません。

(不思議な言葉)

保育士の方達は則道に良いだろうといろんな事に取り組みました。特に外へ出ているんな体験をさす事が多かったようです。年長の頃は、「ちゃーちゃん」「きっき」等の赤ちゃん言葉が数語と「いっぴい」「うーわ」のような意味不明な言葉を喋るようになりました。この頃「いーいーおっこ」

と言えるようになり、「いーいーはいらないの、おっこ」と何度も言いました。しかしなかなか「いーいー」は外れませんでした。よく保育士から「こんな事言っていたけどどういう意味ですか？」と聞かれました。例えば「びーぱーぱー」は『ウサギのミッフィー』のように家族だけが解釈できる不思議な言葉をたくさん作りました。

(今も続くドライブ)

祖父は大好きなドライブに毎日連れてくれました。祖母は則道の様子をしっかりと見つめ、ちょっとでも興味を示した物の名前を何度も何度も言って聞かせました。想像を絶する取り組みでした。上手く発音できなくても言葉と物が一致した時は祖父母共どんな時でも大喜びしてあげたので、言葉の通じる喜びを感じたのかどんどん言葉が増えました。ものよりも看板の特徴あるロゴに興味があり、『三菱』『日石』『マクドナルド』『ホンダ』等でした。そうするうちに「み」を「だ」と置き換え「だつびし」「だかん」等を言っでは、祖母に「なんかちょっとおかしいなあ」と言ってもらうのを楽しんでいました。今の楽しい則道が形成されたのはこの頃かもしれません。

1997.4 のんちゃん小学校入学

山室山小学校に入学しました。今思うと恥ずかしい話ですが、障害を認められなかった私は、養護学校など眼中にありませんでした。しかし情緒障害児学級在籍を機に療育手帳を受けました。

(歩く！から始まった)

入学前から熱心に関わってくださった H 先生はまず学校中を探検させ、行っても良い場所、いけない場所を徹底的に教えました。H 先生は外へ出でいるんなものを見て体験さす授業を多く取り入れ、歩く事で我慢する事や落ち着かせる事に取り組み、歩く授業が合ったのか則道は次第に落ち着き、また体が丈夫になるという副産物まで生じ

ました。

(心の扉ひらく)

2年生の時、ある誤解が元で私の則道に対する閉ざされた心が一気に開きました。この頃「いっぴい、うーわ、まくどなると」のように、ドライブ中に覚えた単語の頭に「いっぴい、うーわ」という変な言葉を付けて喋りました。しかしこの「いっぴい・・・」は私だけに喋るといった具合で家族でもそれぞれにコミュニケーションが違った形で形成されていました。

(多動落ち着く)

3・4・5・6年と障担が変わりました。しかし一貫して言えるのは、クラスメイトとの関わりを育ててくれた事です。3年生の時、歩きの授業の中で体験する事を「すんだら、かえってくる」「だいじなもの、さわったら、あかん」等の2語文3語文の会話として話し出しました(T先生談)。この頃には「いっぴい」等不思議な言葉はあまり言わなくなりました。4年生頃から少しずつ多動が落ち着き机に向かって座れるようになりクラスで授業が受けられました。

(クラスメイト)

先生方の取り組みは、徐々に成果を結び関わってくれる子は多くなり、汚れた靴下を変えてくれたり、鼻をほじくった手でも平気で手をつないでくれるほどでした。修学旅行では体まで洗ってくれた子がいたほどで、他校の仲間からうらやましがられたものです。毎年変わる障担は、「クラスメイトのおかげで助かるわ(6年の障担)」とよく言っていました。

(不思議な魅力)

5・6年の頃は、授業中でも独り言をいう事が多く、しかも絶妙のタイミングでその場に無関係な事を言ったり、先生の書いた黒板の文字を消しにいたり突拍子もない行動をし、クラスメイトの大爆笑を買う事が多く、緊張を解きほぐし和みを与えてくれるいい材料になっていると先生からよく聞かされました。6年生の頃は「なに？

いうこと」等のように会話の中に「なに？」を付けて聞いてくるようになり、質問形式の会話が多くなり、この傾向は今も続いています。但しこの問いかけに答えてあげないと、とても悲しそうにします。

2003.4 わかば学園中学部入学

私達家族は、心温かいクラスメイトを信じ地元中学へ進学する道も考えましたが、なかなかできない身辺自立を身に付けさせたいのと、この子達だけが持つ人に幸せと優しい心を芽生えさす力を大きくしたいと願い養護学校玉城わかば学園中学部に入学する事を決めました。

3、のんちゃんのびのび頑張る

1) 家庭の要望

『個別の指導計画』の作成にあたり「家庭の要望」を訪ねたところ、以下のような要望がでてきた。これを軸に私たちの実践はスタートした。

(からだ)

- 1 たくさん歩いて肥満にならないように
- 2 走るのが苦手なので走り込みして、持続性をつけて欲しい。

(生活)

- 3 小便をズボンをおろさずにできるように。
- 4 大便を介助なしでできるように。
- 5 箸で食事ができるように。

(こころ)

- 6 いつもおだやかな気持ちで人との関わりを持てるようになりたい。

(まなび)

- 7 実生活で役立つ、算数・国語を学ばせてあげたい。買物、自動販売機、切符などの購入のお金の数え方や相手とのやりとり。

2) 連絡帳・通信等でのんちゃんの変化

ここでは、「家庭の要望」(以下「要望」)にそっていきながら、この間の私たちの取り組みとのんちゃんの変化を追ってみたい。

< 1 > 「歩くの大好き」

小学校の時から、学校でも家庭でも「歩くこと」にこだわってきただけあって、のんちゃんは歩くことが大好きである。近辺の1、000m級の山もいくつか踏破してきている。

校外歩行ではいつも先頭に行くのんちゃんの姿があった。私たちは、のんちゃんが他の子と手をつないで歩調を合わせながら歩くということも一つの目当てにして「歩く」ことに取り組んできた。7月の校外学習の時に、一番歩みの遅いNちゃんと手つなぎをさせて内宮を歩いたところ、Nちゃんのスピードを気遣いながらも歩いているのんちゃんの姿がそこにあった。

人と手がつなげるようになってきて嬉しく思います。ちょっと前まで人と手をつなぐなんてこと親でもつないでくれませんでした。

< 連絡帳：母 7 / 15 >

< 2 > 「走るのは苦手？」

持続的に走るということ。

スポーツテストの1000m走があるという時に、お母さんが連絡帳に「持久走？走るのが大嫌いだから、すんなりとは行かないと思いますが。。。」と書いてきた。しかし、実際走ってみると、私たちにマークされながら、走るペースを速くしたり遅くしたりしながらも走り続け9分15秒で走りきることができた。

また12月に入ってからマラソンでは、1月25日に松阪市民マラソン(中学生の部：3km)にエントリーするという事で、学校でも家庭でも走り込みを続けてい

る。(現在進行中のホットな話題なので後で詳述したい)

< 3 > 「お尻でおシッコする子は？」

要望の3に「小便をズボンをおろさずにできるように。」がある。これは実際に一緒にトイレにいて、その都度声をかけることから始めるしかない。そこで、毎朝一緒にトイレにいては「お尻出しておシッコしたらあかん。前だけ下げて!」と声かけを繰り返した。のんちゃんは人がいった言葉を自分なりに取り込んで行動を形成しているところがある。

おシッコのチェックが始まってまもなく、何を間違ったか、「お尻でおシッコする子は？」ということをしきりに言い出した。お尻でおシッコできるわけがないなどと言っているうちに、これは「お尻(を出して=略)で、おシッコをする子は(お尻ペン)」ということ、のんちゃんなりに確認して発していることばだと気が付いた。

そうこうしているうちに、ズボンをおろさずにおシッコはできるようになった。お父さんがそのことに関わって手紙をくれたのでそれを引用しておきたい。

とってもうれしいことがありました。15日、***祭りに行きトイレにいったのんちゃんに「前でしなあい」と言っただけなんです、お尻を出さずに前だけをおろしておシッコをしました。手は腰にあていつものポーズですが、とにかく前だけでできました。しかもズボンを汚さずにできました。上手じゃないけどできました。感動でいっぱいです。先生方のおかげです。

< 父：6 / 16 >

(蛇足)「お尻出して・・・あかん」はもう一つの展開をしている。「だして」が「かして」に変換して、悪いことをしたかなとのんちゃんが自分で感じた時は、「お尻かしたるか？」と冗談めいてお尻をつきだしては、やりとりを楽しんでいるところがある。

< 4 > 「水曜日ははし勉強！」

6月に入って水曜日のクラス学習を「箸の練習」として位置づけ、4人で取り組むようにした。この頃しきりに「今、何勉強？」とたずねてきたのんちゃんに「今は、箸勉強!」と答えたところすっと入っていき、今でも水曜日は、朝の会が終わると、自分から箸勉強の道具を出してくる。箸で積木をつまむ練習から、発泡スチロールに変えて練習を続けているが、

- ・ すくい上げて左手を添えて移動させる (6 / 4)
- ・ 左手は膝において上から挟むように (6 / 25)
- ・ 竹のピンセット。親指と人差し指のピンチが今ひとつ。 (7 / 2)

2学期からは「左手で茶碗を持つように。」という、左手での手づかみができないので、必死になってすくうようにはなかった。しかし、挟むという動作はなかなか難しいことである。

< 5 > 「ビーズ通し頑張ったら!!」

作業では手指の巧緻性を高めるとともに作業の持続性を高めるために、ビーズのれん作りに取り組んできた。最初の頃は、何をするのが飲み込めなかったのか立ち歩きもあった。

そこでビーズ10個ずつを名刺ケースに入れて、まずは5ケースを用意して「これだけ通す。」という形で作業の見通しを持ちやすくした。6月には1時間に100個を目当てにしても十分こなせるようになった。のれんに必要な本数を表にして1本できるたびにシールを貼るようにした。シールを貼ることが楽しみ・励みにもなり、わかば祭までにのれんを完成させることができた。

細かい作業と根気のいる作業で素敵なビーズのれんを作りました。夏休み中も家でビーズを通しました。こんなことができるなんて目を疑うほど細かい作業をこなしてと

にかく感動でした。

<父のHPより 11/26>

<6>やりとりを楽しみながらのコミュニケーション・見通しの形成・

のんちゃんは予定(スケジュール)がとでも気になる子で、「～終わったら何?」と聞くのが日課になっている。入学当初は、それが延々続き「バスにのって帰る。」まで至らないと安心できないような所があった。とにかく不安を取り除くために丁寧に受け答えし見通しをつくりやすくするように心がけてきた。

この頃は「朝の会終わったら?」「体育何?」「100%勇気歌うんは?」などと、主だった授業についてきけば納得できるようになってきている。

視覚的情報の方が入りやすいかと写真付きカードも作ったが、のんちゃんの場合、予定黒板を見ながら「何する?」を確認することで見通しがもてたようだ。

また、のんちゃんはカレンダー男でもあり、1ヶ月の予定表が渡されると校外学習など大きな行事をとっても楽しみにして毎日を過ごしている。宿泊学習などでは、T:「夕ご飯は?」の:「5時。」、T:「寝るのは?」の:「9時。」という具合に時間単位でも見通しを作っていた。

さらに、校外学習でも、何回かやりとりをくりかえすうちに「うじやまだえきでんしゃにのって、とばのジャスコへいく。けんこうセンターで ごはんたべたらあそぶ。こうえんへいって すべりだいすべる。」と、お出かけをことばでイメージすることもできるようになった。

面白かったのは、運動会の日の帰りの会での出来事。「どうやった?」とたずねたら、カレンダー男丸出しの切り込みで「うんどうかいおわたたら、つぎはぶんかさい。」と、居合わせたお父さんお母さんまでも笑いの渦に巻き込んでしまった。

近頃口にすることばで、面白い発展を見せているのは、「3ねんせいになったら しゅうがくりょこういく。」とか「3ねんかんこうこういく。」である。

後者についてはつつこみを入れていくと、
の「3年間高校いける。」
T「高等部行って何するの。」
の「勉強する。」
T「何の勉強するの!」
の「カタカナの勉強する。」
T「カタカナの勉強は中学部で
しとかなあかんわ。」
の「リサイクル勉強する。」

さらに、この続きの家庭でのやりとり
母「高等部卒業したら就職するの?
大学いくの?」
の「だいがくいく」
母「どこの大学?」
の「わかばの大学」

どこまで分かっているかは疑問だが、夢は「わかば学園大学部」まで発展してきている。

この話題は、今年に入ってさらに発展を遂げた。

初詣で、月読宮へ行った時、
「かぜひきませんように、だいがくでべき
ようできますように」と拝んでいました。
ママが「高等部抜けたやんか」と笑って
いました。 1/5 父:メール

<7>「やさいたべやんと・・・やな。」 「ちゃんとする。」

プールが近づいた頃の話で、給食のキュウリをなかなか食べようとしないので「キュウリ食べんと風邪ひくで、風邪ひいたらプール行けへんなあ。」と言うと頑張って全部食べるとか、家でも「全部食べやなプール行かれへんでな。」と言いながら食べたとか、大好きなお出かけと大嫌いな野菜を食べるということを天秤にかけながらも、お

出かけのために大嫌いな野菜と格闘するのんちゃんの姿はほほえましいものがある。

夕ご飯に納豆がでたのですが「**納豆はいらんわ。もうゲーしとるわ!**」というので「それやったら8日のプールはいけへんなー。」といえ「**ちゃんとする。**」といって。納豆もかぼちゃの煮付けも、煮っ転がしもみんな食べました。

<連絡帳：母 7月3日>

それは「宿泊学習」を前にした頃も大いに力を発揮した。

お泊まり!もう楽しみで仕方がないようで、何をするにしても「こんなことしたらお泊まり行けへんよ。」なんてこちらもそのことを口実に・・・、則道も「**ちゃんとする。せんと行かれへんな!**」といっています。 <連絡帳：母 10月2日>

< 8 > トイレの意味するもの?

一日入学での顛末でも分かるように、とにかくのんちゃんはトイレの話抜きには語れない子である。4月当初はとにかくトイレ探検が彼の日課でもあった。探検しては便器の水を流していた。保健室に行っても、汚物処理の水流しがしたくてしょうがないという素振りを見せていた。洋式便所で用を足して、まわりを汚してしまったことがあって、「便座はうんこのときだけ。」という規制で、便座は我慢できるようになり、小便器だけになってきている。まだ、水流しは続いているが、その回数は随分減った。

のんちゃんは、お出かけの時のトイレチェックをものすごく楽しみにしている。校外学習で内宮へ行く時でも、「のんちゃん来週バスにのって内宮の方までいくんやて。」と母がいえば、「赤福食べてトイレ行く。」と答え、大台中学校の生徒が打ち合わせに来てくれた時、「何したい。」と問えば「便座借りる。」といった案配である。

普通我々でも、始めてのところに宿泊した時などは一応非常口のチェックをするように、のんちゃんは初めての場所をトイレをチェックすることによって受け入れているような所があるのではないだろうかと思う。とにかくトイレが大好きな子である。

3) 家庭からの連絡帳などに見るわかば学園に来てからののんちゃんの大きな変化

行事が終わるたびに、家庭から行事の感想とのんちゃんの成長に関わって長い手紙をもらうことは前にもふれた。そして、私たちはその手紙を見せてもらうたびに、のんちゃんがわかばに来てからの変化というのはものすごく大きいものがあること一のんちゃんはわかばに入ってから、『水をえた魚のように』生き生きと過ごしていること一を改めて知らされている。

ここに、運動会とわかば祭の後にももらったのんちゃんの大きな変化について綴られた手紙を紹介しつつ、わかば学園がのんちゃんにとって持っている意味を改めて考えてみたいと思う。

楽しい運動会ありがとう!

保育所から小学校6年生まで運動会は、どうやってみんなと一緒にいられるか、進行の妨げにならないかなど、とにかくみんなに合わせる事が則道にとっての運動会であって、その中で1つでも何かを見出し喜びとしていました。でも、わかば学園での初めての運動会は、則道自身の運動会をやっと見せていただきました。「のびのび」で練習の様子がよく分かっていたのでとても楽しみでした。**それに運動会が大嫌いな則道が毎日笑顔で登校する姿は本物のように思っていました、やっぱり本物でした。あんなに輝いて見えた運動会、本当にはじめてでした。おまけに9年間徒競走**

では、ピリばかり、完走するのが大変だったのに1等の旗の下にいる則道を見られるとは思いませんでした。小学校の時は後がつかえてくるので、ゴール直前に次のスタートが始まるようなこともありました。わかばでは、全員がゴールできる、何ともゆっくり流れるすばらしさ。クラスメイトの笑顔も本当に素敵でした。1 - 2の仲間は最高ですね、先生が言ったようにこの4人で何か素晴らしい輝きが出せるように思いました。K君が途中で帰ったのは残念だったけど、おかげで2回も出場できちょっと得しました。この子達が輝いて見える運動会でしたが、逆に先生達の大変さもよく分かりました。本当にありがとうございました。10 / 1 : 父

わかば祭！最高でした！

いつも感動の日々をいただきありがとうございます。わかば祭はとても楽しくこんなにリラックスして見学できた文化祭は始めてでした。今までは、みんなに迷惑をかけないか、パニックにならないかと心配しながらの見学でした。確か5年生の時は、ビデオを構えていたら則道の姿がなく不安を感じていたら、やっぱりパニックになっていて出演できなかつたことがあります。しかしそんな中からもうれしいことを見いだしながら楽しくやってきました。(中略)

オペレッタ「ピーマンマンとかげひきキン」は最高でした。はっきり言って中学部最高に良かったです。すごいのは演技もですが、いままでリボンも付けささない則道のあの衣装には驚きと感動でした。いままでなら嫌がる則道の手を取りながらみんなにあわせるくらいなのに、自分で本当に一人で演技しているなんて胸が熱くなる思いでした。

泣くとこやった。ビデオを見た祖父母は「見

に行けんで良かった。感動して泣くとこやった。」と感極まっていた。則道と失礼ですがN先生の「ぐうたらかぜひきキン」は当たり役だったように思います。K君は来れずに残念でしたが、みんな本当に輝いていましたね。あの輝きを引き出してくれる先生方の創意・工夫・努力に感謝します。(中略)発表の後、小学校の時、関わっていただいた先生が「のんちゃんすごかったね。」「自分で演技しとったやんか。」「くやしいわ。」「わかばに惨敗やわ。」「何でいままでしてくれやんだんやろ。」といい意味で大変喜んでくれ、学校へ帰ったら先生方に報告しますと言ってくれました。(後略) 11 / 26 : 父

長々と引用したが、わかば学園はのんちゃんにとって本当に必要な場(居心地のいい空間)であり、わかば学園での生活の中で、のんちゃんは大きく成長し『水をえた魚のように頑張り』生き生きと毎日を送っていることがわかる。

中学部に入ってからなのんちゃんを見ているだけでは、これだけのことを私たちは感じることはできなかつただろう。これらの手紙を通して、わかば学園に入学する前ののんちゃんの姿を知り、家族ののんちゃんを見つめる暖かい視線に触れることによって、私たちも改めてのんちゃんを見つめる機会がいただけたと考える。

4、のんちゃんの育ちを支えるもの

1) 家庭の努力に学ぶ

のんちゃんのお父さんは、のんちゃんが生まれてからしばらくは仕事人間で、子育ては、お母さんに任せきっていた。しかし、のんちゃんが小学校2年生の時のある事件をきっかけに大きく変わりだした。そして、元担任の先生とともに、のんちゃんを取り

巻く子ども達の親御さんと子育て支援の輪を広げてきている。(詳しくは『のんちゃんと呼ぶ』参照)

のんちゃんの障害を認めようとしなかったお父さんが、家族の中心にのんちゃんを位置づけるようになるまでの変革の過程、さらには、多くの仲間とともに一丸となって、のんちゃんやのんちゃんを取り巻く子ども達を育てている姿には頭が下がる。その根底には物事をプラスに見るという『プラス思考』の姿勢が貫かれている。

2) 今を生きる『のんちゃん』とどれだけ楽しく関わるか!

自閉症の子へのアプローチ

小林隆児は「情動コミュニケーション」ということばを用いて「彼らが自由に安心して自分の欲求や気持ち、情動を表出することができるように保障していくことである。そこでは、われわれの価値判断でもってかれらの行動(自己表出)を良いとか悪いとかを決めることなく、まず彼らの気持ちの動きを我々が容易に感じ取れるような関係を作っていくように心がけることが必要である。」と述べているが、彼らと情動的なつながりを持つことは何にもまして重要な気がしている。

お父さんの開設する掲示板に、「(わかばの運動会が、)きちっとしていないところがまた非常に楽しくてリラックスできました。」というお父さんの感想があった。私は「人生苦しいことばかりじゃ大変。リラックスして楽しんで、少しは伸ばそうか!で、のびなかつたらごめんなさいの繰り返しです。」と書き込みをしたことがある。すると、お父さんは私の書き込みへの賛意を示してくださった。

こんなやりとりもあった。

「学体研の小学部の報告でこんな素敵なことを語っていました。

『子ども達は未来に向かって伸びていく存在です。でも、同時に今を生き、今輝いている存在です。この子ども達と同じ場を共有し、同じ時を過ごすことの喜びを日々感じながら関わっている。』 さらに『支援の方向は「できない」ことを「できる」ようにしていく。あるいは「不得手を克服していく」という旧来の考え方ではなく、「できること」「したいこと」を基軸にして、楽しさ豊かさを味わいながら、「自分からやってみよう」という方向を目指しています。自発的で能動的な動きの中でこそ、発達は獲得されていくと考える。』と。私の中にある思いで、うまく言えなかったことを、ズバリ言ってもらっているのもすごく気に入っている。自分たちの実践を振り替えて、反省すべきことはいろいろあるが、「できる・できない」じゃなくって、やっぱその子らしさをどう広げていくかだと思う。

子ども達は「未来に生きる存在」だけど、そんな難しいことより「今を生きる『のんちゃん』とどれだけ楽しく関わるか!」も大切な視点だと思っています。楽しく毎日が過ごせて、なおかつ、のんちゃんが伸びる手助けができれば。。。」と書き込みをしたら、

「私も全く同意見で「今を生きる『のんちゃん』とどれだけ楽しく関わるか!」が大切だと信じています。もちろん未来を考えていくのは大切な事なんですけど、今を楽しくしっかり生きていくことこそ未来につながるのですよね、

のんちゃんが何で輝くのかまだまだ未知数ですし逆に言えば無限大だと思います。その中で、先生方にはご自身の得意分野で思いっきりぶつかっていただきたいと願っています。それがスポーツであり、文化活動であり、また個人的な趣味であっても全く関係ありません。得意分野で真っ向ぶつかっていただき、それがのんちゃんにとって失敗であっていいではありませんか、

またやり直したらいいだけです。かれらの物差しは世間一般の長さではないのですから、それに全く失敗という事は決してないと思います。今、芽が出なくても、真っ向ぶっかっていただいた事で将来芽を吹き出す事があると信じています。

ご自分のしたいこと、子供達と一生懸命やってください。それこそ私達が地元の仲間と別れてまでわかば学園を望んだ事です。」という返信をいただいた。おおらかに私たちをも包み込んでくださるのんちゃんのお父さんに感謝している。

そして2学期末には以下のような心温まる手紙をいただいた。

心地よい空間で安心してこそ

懇談会で先生から「『小学校の時は大変だったのが今は感動です。』といわれるが、何で大変だったのですか？」ときかれましたが、私たちもいったいあれは何だったんだと思うほどです。わかば祭の時も書きましたが、山室山小の先生が『わかばに完敗やわ』といってくれましたが、最近あった先生からは、『のんちゃんは、乾いた砂に水がしみこむようにわかばで吸収しとるんやな』といわれました。また則道をよく知っているN先生は『安心の上にとっかり座っている』と、いい意味でいってくださっています。(中略)

私なりに思うのですが、今までは確かにみんなにあわせるのが授業で、その中で特に山室山小はクラスメイトとの関わりを大切に育てくださったおかげで、逆に則道は何もなくてもまわりが手を貸してくれるし、したくないことはせずとも住んでいったと思います。そうですね、みんなに合わせられないことはしなくても良いというわけでもなくとも実際はそうになっていました。でも、わかばでは自分でしなくてははいけないし、今までは逃げる自分を友達が捕まえ

に来たし、手を引いてもらって移動していたのが、全く逆の立場になり、今間までない素敵な体験が加わり、わかばのリズム、先生方、クラスメイト、そしてわかばそのものが則道にマッチしたのでしょうか。(中略)

先日、Hクリニックの療育で『養護学校をぬるま湯という人がいるけど、のんちゃんがこんなことができるようになったことをいっぱいアピールしてどんどん外に出る経験をさせてあげて』といわれました。確かにぬるま湯という人がありますが、私はそれは間違いであると思います。『心地よい空間で安心して楽しい中で学べる。』こんな素晴らしいことはないし、ある意味小学校の時のように、できないことはしない、いつも助けてくれるクラスメイトがいる環境の方がぬるま湯に近かったのかもしれませんが、ただ地元での6年間が合ってこそ今の今であるとも確信しています。長々と勝手な思いを書きましたが、そう思えるほど素晴らしいわかば学園であり、この2学期で『わかばに決めて良かった。』という答えを見つけられました。(中略)本当に楽しい2学期をありがとうございました。まだまだ山あり谷ありだとは思いますが、3学期も楽しくのびのび過ごせたらいいなあと思います。12/22:父

毎日の連絡帳でのやりとりや、学級通信「のびのび」、さらには大きな行事ごとの手紙、「のんちゃんと歩む」というHP等の存在は、私たちがのんちゃんを見つめわかば学園の存在意義を見つめ直す上でものすごい大きな力を発揮している。そして、のんちゃんとわかば学園の過去・現在・未来をつなぐ太いパイプとして脈打っている。

5、のんちゃんの課題も

見つめつつ

2学期を経過して、のんちゃんとの毎日の楽しかったことだけが、思い出される。しかし、それではいけないわけで、『個別の指導計画』を軸にした実践の中ででてきたのんちゃんの課題へのアプローチも忘れてはいけない。

特に、勉強嫌いののんちゃんの課題は、体のしなやかさ、手指の器用さ・巧緻性、身辺処理の自立あるいは、究極の課題である物ごとに取り組む意欲、自己選択・自己決定など多岐に渡る。

しかし、これまでの家庭との連携を基礎にすれば、ゆっくりではあるが、山を越え谷を越えてのびていくことができるような気がする。

ここで、お父さん・お母さんの視点から4月の「要望」にたちかえりながら、のんちゃんの今後について語ってもらいたい。『個別の指導計画』をどう充実させていくかというわかば学園の課題にも直結していくものである。

わずか2学期でこれほど輝きだすとは思っていませんでした。たくさんの輝きだした事、また今後の課題として見えてきたものを「家庭の要望」にそって見てみると、

(からだ)

1 たくさん歩いて・小学校から続く「歩く」への思い入れと、外へ出ていっぱい見て、体験させてあげたいの願いも込めていましたが、全く私達の願いどおりの学園生活となり大変嬉しく思います。「歩く、見る、体験する」は家庭でも続けていく永遠の課題と位置付けています。

2 走るのが・これほどの体力がありながら耐えるという持続性がありませんでした。しかし小2の時から参加している松阪シティーマラソンに悩んだ末のエントリーに、先生が「学校でも取り組みましょうか」との連絡にととも励まされ、学園と家庭とで目標をもって取り組んでいます。無理と

思っていた課題が今後も極めていきたい課題となりました。

* (からだ) 1 2 ありがとうございます

(生活)

3 小便を・市教委の進路相談で「C中では取り組みは無理でしょうね」と言われた課題ですが、こんな短期間で出来る様になった事に感謝と感激です。今後はチャックのズボンでも出来れば、また用足し中のよそ見等なくすマナーの向上も課題としていきたいです。

4 大便・こんな事までと心苦しいのですが切実な課題です。しかし家庭でのウェイトが大きく、また分かっているのですが、日常に追われついつい手を貸してしまいます。ティッシュの切り方やズボンの上からでも拭き方を擬似体験させたり出来ないか模索したいです。

5 箸で・感謝と驚きでもありました。私より上手に持ちます。しかし4同様家庭ではせっかくの学園での取り組みを無にしてしまう事があり反省です。

(生活) 3 5 ありがとうございます

4 5 家庭における反省と今後の課題

(こころ)

6 いつもおだやかに・わかば学園の全てがおおらかに則道を包み込んでくれて、心穏やかに笑顔で毎日を送っているのがはっきり分かります。先生方や生徒達の名前を言って会話を楽しむ毎日です。「のびのび」でクラスメイトと手をつないで歩いた事を知った妻は喜びを隠しませんでした。このレポートの中の「自閉症の子へのアプローチ」に見る事が出来るのですが、私達の価値観で則道を人と接しさせるのではなく、周りの人に則道や仲間の事を知ってもらう事が大事なのではないでしょうか、ゆっくりじっくり歩まなければならない課題と位置付けられます。

(こころ) 6 ありがとうございます

(まなび)

7 実生活で・・・遠大な課題だったかもしれませんが。しかし最近はお金に興味を示し「せんえん、せんえん」と言ってパタパタさせたりします(価値は分かっています)。また車のナンバーの「三重 500」を「みえ 500 えん」と読みます。学習から得たものですね、とてもとても長い道のりだと思いますが、価値を知るより体得するのが当面の課題と思います。

* (まなび) 7 今後もよろしく願います

勝手な事を書いてしまいました。先生方の創意・工夫・努力・そして熱意を持ってして短期間に輝き、今の姿になれた事に感謝の気持ちでいっぱいです。

これは夢物語かもしれませんが、将来は仲間と共に自然の中で楽しく心地よい空間を作り、のびのびと穏やかに生涯を送らせてあげたいと願っています。その中で則道が輝けるようにわかば学園と家庭で出来る課題を見つけ伸ばせたらと願っています。

6、終わりに

あれも言いたいこれも言いたいと思いつつながら、さらには、お父さんにも部分的に執筆を強要しながら、このレポートはできた。

当初ねらっていた「親と教師の連携の新しい姿」を浮き彫りにしながら「わかば学園がのんちゃんの成長にとって持つ意味」を明らかにするという課題をどこまで果たせたかわからないが。。。とりあえず、今回はここでレポートの「締め」をしたい。

「締め」をするにあたって、大変な協力をおしまずにしてくださったお父さん・お母さんのひと言を添えておきたい。

このレポートの共同制作を持ちかけられた時、多くの方々に則道の事を通して何かを見つけていただけるチャンスを得たととても嬉しく思いました。家庭でしか見え

ない課題、学園でしか見えない課題、親しか知らない事、先生しか知らない事等々、これらを教師と親という立場を超え共有できる関係であれば、より一層子供の目線に近づきその世界を知ることができると思います。私達は連絡帳の他に学級通信「のびのび」を通して学園生活を詳しく知る事が出来ます。また幸運にも IT を活用してリアルタイムで意見交換でき、面と向かって言い難い思いも補う事が出来ます。また2学期の懇談会では学園生活をビデオで見せていただいたおかげで家庭で出来る課題を発見できました。

これらはハード面はもちろんですが、親はもちろん関わる全ての先生方の理解と協力、そして1 - 2という規模的な関係も含め幸運だったのかも知れません。しかしどの様な形態であれ、お互いに学び喜びを共有できる学校と家庭との素晴らしい連携を作ってこそ子供が輝き出す事が分かりました。この関係を作っていく事は双方にとり大きな課題だと思います。その意味も込めてこのレポートの意義の大きさを感じると共に今後につながる道筋になればと願います。

私達家族は則道のおかげで想像もしなかった価値観に目覚めた今、**楽しくていいじゃないか、今を楽しみながらそこから学ぶものもたくさんあるではないか、笑顔でゆっくりゆっくり歩めばいいじゃないか**と考えています。私は案外不勉強です、知識として知ることは大切な事ですがそれにとらわれ将来に不安を抱くよりは、**親も子供と一緒に笑顔で今を大切に生きていく事こそ大事だ**と思うからです。わかば学園に入り**楽しくのびのび学ぶ**子供達と先生方にめぐり会うことができました。この道と一緒に歩める事に大いに感謝しつつ、楽しくのびのびの輪が広がる事を願うのみです。これからもよろしく願います。

わかば学園ありがとう

付録：マラソン大会に向けて

< 1 > シティーマラソンにエントリー！

12月に入って学校では耐寒マラソンが始まった。「どれくらい走るのですか?」と家庭のマラソンへの関心が強いと思っていたら、11日の連絡帳に「松阪シティーマラソン：中学生の部(3km)に参加することにしました。」と書いてきた。

< 昨年までも参加していたが、2kmで何とか歩き歩き完走していたらしい。しかし、今年は中学生の部でしかも3kmと距離も伸びるので、躊躇していたらしいが、父親の伴走つきで許可が出たので参加を決意したようだ。 >

それを見て私は、いきなり「のんちゃん、昼休みマラソンするぞ。池のまわり走ろう。」といいだした。のんちゃんにとっては迷惑な話である。

給食後、少々雨模様だったが池の周りを二人で走った。次の日も、朝からその話をしていくと次第にそのモードになって、給食終了時には「ちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃつとはしるわ!」と「ちゃちゃちゃ」を重ねて自分自身にいいきかせていた。

< 2 > のんちゃんにとっては 迷惑なことだけど！

早速その日の様子を、メールで知らせ、シティーマラソンに向けて、学校でも家でも走り込みを続けていくことの意味を確認する。こうして2学期の最後から3学期始めにかけて、家でも学校でも市民マラソンに向けての練習が続くことになった。

走り始めた頃は、手をつなごうとしてきては叱られ(の「手つなぐんは?」T「あるとき!」)、止まっては叱られ(の「とまるんは?」T「あかんゆっくり走りな」)しながら走っていた。それが、一週間もすると、こちらのことばを取り込んで、「一人で走らなあかん

よ。」「途中で止まったらあかんで。」問いながら、自分の行動を規制する姿があった。

ここに、はじめは外的に強制されたマラソンだけど、自分の中に取り込んでいこうとする姿の芽生えを見るというのは大げさだろうか?

< 3 > 完走への目途(目標30分)

のんちゃんにとって、シティーマラソンは参加すること自体が目的でそこでの結果は求めてはいない(ピリを覚悟の参加である)。

でも、練習を積む中で、学校では12~13分で池を一周し、家では約3kmを21~26分くらいで走るようになった。冬休みも年末年始と何かと忙しい時期にもかかわらず、5日も練習している。冬休みに連絡を取りあって時間的な目標を30分にした。

目標を30分とするなら、そんなに走り込まなくても、目標時間内にはいるだけの力をのんちゃんは持っているだろうし、とにかく30分以内で完走という目途は立った。

< 4 > 自己決定のきっかけつかみ

毎日何が何でも練習をとということも必要ではなさそうなので、マラソンの練習に対してのんちゃん自身が自己決定できるように働きかけてみたいと考えて若干の取り組みをしてみた。

まずはじめて試みた12月17日のやりとりは以下のものであった。

この日から短縮。給食を食べて無理したら走れるが、まあ休養もと思って朝の会へ。
T:「のんちゃん!池マラソンどうしよう!?!」

「池マラソン」のことばを聞くと、目をそらしていやそうな顔。

T:「走る?やめる?」

と聞くと、ついついつられて

の：「はしる」といってしまう。

そこで、黒板に

()はしる

()はしらない

とかいて、

T：「走る？走らない？ して！」

の：「はしる」

T：「走らない？走る？」

の：「はしらない。」

これだけの状況設定をして、だめおし。

T：「走る？走らない？」

の：「はしらない。」

T：「よおし！走るのやめ！」

もう一回聞いたらどうなっていたか？！

自己決定は、やっぱりむずかしい。

< 5 > 自己決定のきっかけつかみ

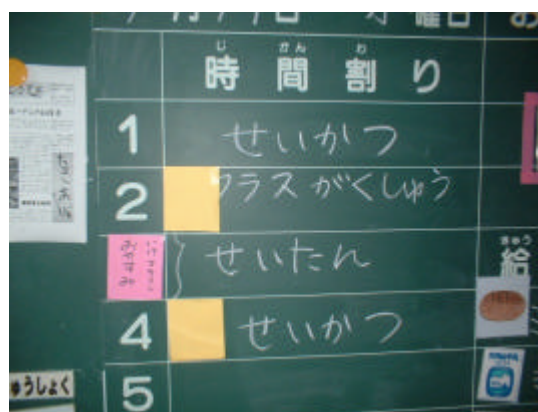
3学期が始まって、朝のマラソンも復活した9日。高尚にも生単の時間に書き初めをした。「のんちゃん、何って書こうか？」と聞いてまともには答えられないのいいところ「紙に書く。」「則道書く。」とかわしてくるので「『はしる』って書こう。」と持ちかける。そして、ついでにカレンダーを見て、「いつから『池マラソン』はじめようか。」ともちかけ、「13日」という答えを引き出す。

マラソン大会が終わるまでは、のんちゃんの「はしる」という書き初めは黒板の中央に張り続けられることになる。

こうして脇を固めながら「はしる」ことの自己決定を迫る場面を作っていた。

< 6 > 自己決定のきっかけつかみ

自己決定は、自己選択ができて始めて可能となる。そこで選択しやすいように、「はしる(黄色いカード)」「はしらない(赤いカード)」を用意して予定黒板に貼りながら選択するようにし向けてみた。



1月14日水曜日、クラス学習の時間と4限目に黄色いカードを貼って、

T：「則道、池マラソンするならここやけど。。。といたら！

の：「(クラス学習をさして)着勉強！」

というので、2限目のカードは撤去。

T：「(4限目の黄色いカードとピンクのカードを並べて)着替えの後に走るか？おやすみか？」と聞いたら、

の：(若干興奮気味に)「おやすみ！」といったので、休みとした。

1月16日金曜日、朝着替えている時に

T：「則道、今日池マラソンどうしよう！」とたずねると

の：「池マラソン走る。」と何気ない会話。で、着替えが終ってから、黒板に「1:00 -

2:00 -」の選択肢を示して、

T：「どっちにしようか?!」と聞くが、

の：「牛乳パック(しまいに)いく。」の一点張りで、質問は入らず??

の：「11時から」などといっている。

T：「11時は作業やわさ。」といたら、やっとな、

の：「2:00 -」と答える。といった案配で、およそ自己選択・自己決定をやるという雰囲気ではない。

そもそもマラソンの練習をするなどということ自体が、のんちゃん自身の要求でないのだからやむを得ないのかもしれない。

お菓子を買いに行っても欲しいものをいわないのんちゃん！クリスマスのプレゼントも自分からは要求しないのんちゃん！なのに・・・そう簡単に選択なんてしてくれないということに気づく。

自己決定は、のんちゃん自身の要求に根ざしたことから始めるのが本筋であると考え直す。

< 7 > マラソンの練習を振り返って

マラソンの練習を巡って自己決定を目指す取り組みは挫折した。しかし、マラソンの練習を学校と家庭で連携して取り組んだことによる成果はやはり大きなものがある。

(1) はじめは、大人の側のやらせの取り組みだったが、長い目で見ると、次第にのんちゃん自身のものとなりつつあるのではないかと思う。佐々木正美は「自閉症の人には、はじめから好きなものってないのです。新しいものとか、見通しの立ちにくいことは苦痛なのです。ですから、ひどく苦痛を感じないように練習を繰り返して、上達して身に付くと好きになります。」といているが、今回のマラソンの取り組みはまさにそのことを示しているようにも思う。

(2) 今年の学級の構成がこの取り組みを可能にする状況にあったということがもっとも大きな条件ではあるが、「たぶん先生が『学校でも取り組みましょうか』といってくれなかったら、今の練習する姿は絶対なかったと思います。25日が近づくとつれ、不安が募り、ドキドキしていたでしょう。」というお父さんのことばを見れば分かるように、ここにも学校と家庭との連携の成果がある。

(3) 親の視点と教師の視点の違いというものについて改めて考えられたことも大きなことだった。

『自己決定』を巡る取り組みの顛末で、近視眼的な教師の取り組みを反省したとこ

ろだが、以下のようなお父さんの遠大な見通しを聞いた時、教師の見通しの弱さ、甘さを痛感する。

「これからこのマラソンが続く限り参加したいと思っています。いつの日にか1人で完走できる日を夢見てこの時期だけにとらわれず、月に一度は自己決定も取り入れ、走り込む日をのんちゃんと決めたりしながら、『歩く』と同じく私たちのライフスタイルにしていきたいと思っています。」

(4) 結果的にではあるが、この取り組みが、『個別の指導計画』の「要望」の2「走るのが苦手なので走り込みをして、持続性をつけて欲しい。」への回答を、学校と家庭の共同の取り組みを通して、一定の見通しを持てるまでに至ったことの意義は大きいだろう。

お父さんは、こんな位置づけをしてくれた。「このマラソンの取り組みは家庭の要望を双方の取り組みで実らせ、そして新たな課題に取り組むためのプロローグとして位置づけることができる。」と。



今年こそ“自力完走”

自閉症克服へ修練

父母の励ましで渡辺君(12歳)

松阪市光町の県養護学校玉城わかば学園中学部1年・渡辺則道君(12)は、25日に同市立野町の中部台運動公園で開かれる「第6回松阪シティマラソン大会」に出場する。過去に4回出場したが、自閉症のため慣れない場に出るのが苦手で、毎回泣き叫んで嫌がるどころを付き添いの父・正則さん(43)らに腕を引っ張られながら、何とかゴールしてきた。中学生になった今年こそ自力で完走しようと、先月から大会と同じコースで練習。「完走を果たし障害を抱える人たちに勇気を与えられたい」と頑張っている。



本番に向けてマラソンの練習をする(手前から)渡辺則道君、正則さん、奈保実さん。立野町の中部台運動公園で。

渡辺君は幼いころから まうなどの症状が出る。自閉症で、初めての場所や大勢の人がいる場所に出向くと、取り乱して3年のとき、症状を克服

するとともに、体育が苦手な運動不足な渡辺君の体力作りになれらると、学校の教師に勧められた。小4以下は、保護者と一緒に走る2+のベアジョギングの種目に出場することになるため、正則さんらは思い切っ

< 8 > 結果

(1) 練習の足取り

学校で13日139分、家で19日479分、時間にして9時間、距離にして72kmほど走ったことになる。なかなか頑張ったと思う。番外だが、「走ろう会」で、10分間に12周(1440m)走った時、これは頑張れば3km20分を切ることも夢ではないなと思った。

こんなのんちゃんのシティーマラソンに向けた取り組みが、「夕刊三重」に「今年こそ自力完走」という見出しのもと紹介された。

(2) いよいよ当日。感動を予感させるかのように空はきれいに晴れ渡った。みんなの邪魔にならないように後ろの方からスタートしたが、みんなのペースに引っ張られて走りだした。あまりに早いので「のんちゃん、もうちょっと、ゆっくりでええよ」と声を掛け、ようやくいつものペースになった。

結果は、138人中138位タイム18分43秒自力完走であった。予想外の健闘にみんなびっくり、感動で涙を流した人(小学校の時の担任)もいた。

出場させた。ところが大会では走るのが途中で止まったり、泣いたり大騒ぎ。正則さんが手を引いて半ば力づくでゴールさせていた。それから昨年まで毎年出場したが、同じような状態だったと。中学生になった今年、走る距離も3.1に延び、正則さんらは引っ張ってゴールさせるには厳しいとみて、昨年、養護学校の担任・樋口勝一教諭に相談したところ、「新しい場、慣れない場所、コースを覚えるとなると、同じコースで練習して、コースを覚えると落ちち着いて走れるはず」とアドバイスを受けた。そこで12月中旬から2日に1回のペースで、正則さんや母・奈保実さん(40)とともに、本番のコースでのトレーニングが始まった。最初はやはり嫌だったが、学校でも休み時間に樋口教諭と練習し、ゆっくりながら自分のペースを作って走れるようになった。今ではほとんど止まることなく、3.1のコースを30分以内で完走できる。正則さんは「障害児を持つ親の中には、こういう大会に出場させたいと思っている人は多いと思う。自力完走を果たし、皆が出場するのを勇気付けられれば、奈保実さんは「走るのもう大丈夫。あとは大勢の人が参加する本番の雰囲気になれないように」と話している。

『夕刊三重』 1 / 20 <火>

この取り組みで則道の心には、小さな小さな自己決定の種がまかれたと信じています。「のんちゃんと楽しくのびのび歩む」これこそ「わかば学園が持つ意味」そのものであることを実感したマラソン練習だった。のんちゃん 感動をありがとう! (父)

< 9 >

あとがき

樋口先生との夢は、シティーマラソンで3キロを伴走なしで自らの意思で完全自力完走することでした。そして2004年4月から始めたオアシスマラソンで1時間走り続ける体力と精神力を身につけ、わかば学園で人との関わりを楽しむ事が出来る様にまで成長させていただいたおかげで、ついに2005年1月に入り練習で伴走なしで完全自力完走を成し得た。この時、樋口先生は大変喜ばれ、メールのやり取りで目標タイムを20分以内にしましょうと相談しました。1月30日の本番は練習の成果をいかに発揮して、見事、伴走なし完全自力完走でゴールした。しかも151人中148位という驚くべき順位とタイムは目標をクリアする19分36秒という好成績でした。すぐに携帯で樋口先生に報告して、まるで家族のように喜び合いました。

則道の成長は樋口先生との出会いと、わかば学園と先生方と楽しいクラスメイトのお陰です。

樋口先生ありがとう。



< 1月26日夕刊三重 >
完走出来た事も新聞に載りました



自力完走を目指して走る渡辺則道君と伴走する正則さん。立野町の中部台運動公園で

初めて自力完走
シテイマラソンで
自閉症の渡辺君

自力完走を目指し、25日に松阪市立野町の中部台運動公園で開かれた「第6回松阪シテイマラソン大会」に出場した同市光町の県養護学校玉城わかば学園中学部1年・渡辺則道君(12)は、介助なしで完走を果たした。

自閉症を持つ渡辺君は、同大会に過去4回出場したが、途中で取り乱してしまふなどで、父・正則さん(43)らが手を引いて何とかゴールさせていた。

今回は1カ月前から、家庭と学校が連携して練習を始め、自力完走を目

指していた。

この日は雰囲気押されることなく他の出場者らとともに午前10時20分にスタート。沿道からの声援にも後押しされながら、自分のペースで力強く足を運び、目標の30分を大きく上回る18分43秒のタイムでゴールした。

正則さんは、「ゴール後は感動で胸がいっぱいになりました。毎年参加し、将来は伴走なしで自力完走できるのを目標にしたいです」と喜んでいました。

このレポートは2004年1月28日 わかば学園グループ研修 自閉症のコミュニケーションにて樋口先生が発表されました。現在、松阪市特別支援教育振興会で新任障害児担任の教育用として活用されています。またこのレポートを知った明和地区の小学校でも使ってもらいました。もしご感想など頂ければ嬉しいです。